

# 地方の文化運動を主導する —オーガナイザーとしての八田豊

渡辺 千尋

## はじめに

八田豊は1951年に地元福井へ戻り、土岡秀太郎が主催する北美文化協会(北美)の一員となった。八田は80年代の失明後もアーティストとしての矜持を変えらず持ち、聴覚や触覚を頼りにして福井の地で旺盛な創作活動を継続している。

八田のもうひとつの重要な活動として、福井でのアートイベントや文化運動の運営に積極的に関わってきたことが挙げられる。1977年に北美の活動が終了したのち、八田は福井の若手作家の育成と美術文化を絶やさないよう尽力してきた。本稿では、八田が80年代以降に関わることとなった「現代美術今立紙展」「国際丹南アートフェスティバル」<sup>(1)</sup>を中心に、オーガナイザーとしての八田について振り返る。

## 前史

1920年、ロシア革命に伴い、画家ダヴィド・ブルリュークとヴィクトル・バリモフはロシア未来派の絵画など470点を携え敦賀に到着した。明治維新後、日本海側地域の港湾重要拠点として舞鶴が軍事関係を担ったのに対して、人事・物流関係の要衝となったのが福井県の敦賀湾であった。1902年、敦賀とウラジオストクの間で定期便が就航したことにより、敦賀は大正期にロシア未来派の美術が日本へ持ち込まれ、拡散されていく際の玄関口となったのである。

ロシア未来派の日本国内への浸透には、福井市出身の木下秀一郎が重要な役割を担った。木下は日本医学専門学校在学中から絵画制作を行い、未来派美術協会など大正期の前衛美術と積極的に関わっていった。1922年には、

大阪や名古屋を巡回していたロシア未来派展を福井に誘致し、翌年には『未来派とは?答へる』(中央美術社刊)を発表する。そして木下は1922年福井にて、土岡秀太郎ら数十名の会員からなる「北荘画会」を結成した。「北荘」とは北国之意気荘んなことを願っての命名であり、中央画壇から遠く離れた福井の地に新風を巻き込み、新たな芸術を創出していこうとする熱意の表れであった<sup>(2)</sup>。木下は医業に専念するため1926年には画業を辞めているが、その後の北荘画会は土岡秀太郎を中心として、太平洋戦争開戦となる1941年ごろまで活発に活動した<sup>(3)</sup>。

土岡秀太郎は1895年、福井県南条郡王子保村(現・越前市)の地主の家に生まれた。第一次世界大戦後の好景気に乗じて、福井から神戸へ移り羽二重の輸出で一攫千金を狙ったが、失敗して帰郷したという。しかし仕事で京阪神を行き来する合間に、当地の先進的な美術や文化に触れることができた。土岡は帰郷後に見た地元の美術界について「改めて福井の画壇の状態を見直すと、あまりにもお粗末なのに驚いた。」と率直な感想を述べている<sup>(4)</sup>。そして木下との出会いもあり、土岡は福井に前衛美術の精神を根付かせるべく、北荘画会を結成したのだった。

土岡は戦後まもない1948年に、北荘画会の後継となる「北美文化協会」(北美)を立ち上げる。福井という一地方都市に根ざしながら新しい文化を地域にもたらし、また地域から中央・世界に通用する芸術を展開しようとしたのである。

北美文化協会は、福井県内での展示活動のほか大阪や東京でもグループ展を開催した。また夏には川口軌外や岡本太郎といった前衛芸術家、そして針生一郎や瀬木慎一などの美術批評家らを講師に招いて講習会を開き、グループ全体の洗練と前衛的な精神の底上げが図ら

れた。そして八田は、少年期からの盟友である河合勇とともに北美に属し、60年代にカーヴィングによる独自の作風を獲得する。これによって八田は、1965年の第4回北陸中日美術展に出品して大賞を受賞するなど目覚ましい活躍を見せたが、網膜色素変性症により徐々に視力は悪化し、80年代には完全に失明状態となる。また北美は1977年に役目を終えたとして活動を終了し、主導者であった土岡も1979年にこの世を去った。

#### 現代美術今立紙展

河合勇は1960年からニューヨークで活動していたが、帰国後福井に戻り、1976年の秋から、知人の紹介で今立町の旧八石分校に住み着き制作をするようになった。この頃の河合は、奈良時代からの地場産業である越前和紙の製造工程で大量に捨てられる切れ端が、絵具に取って代わる素晴らしい画材なのではないかと考え始めていた。試行錯誤する河合の周囲には創作経験がない者を含め若者たちが集まるようになり、旧八石分校では絵画や陶芸の教室「八ツ杉現代美術研究所」が開かれた。しかし河合はかねてよりの持病が悪化し、1979年に入院することになった。若者たちは河合を元気づけるための展覧会を計画し、1979年11月25日から12月1日、今立勤労会館体育館にて「紙の実験展」が開催された<sup>(5)</sup>。しかし河合は1980年1月、49歳の若さで亡くなる。若い作家たちは、今度は河合への追悼を込めて第2回展を開催した。

土岡、そして河合を相次いで亡くした地域の若い作家たちが、新たな指導者として頼ったのが八田であった。八田は芸術家としての生命線である視力の低下が深刻になっていたが、彼らの意志を汲み「紙の実験展」の運営指導に加わることとなった。土岡と河合が実践しようとしていた、地域の文化を醸成するために尽力するという精神を、八田がこの時継承したといえるだろう。八田が若手作家の育成や、一地方における

文化運動の重要性を痛感していたことは、北美の定期的な活動報告誌であった『北美文化』16号に寄せた、第2回武生美術協会展の批評文からも読み取れる。

会員展なんてぬるま湯的な思考で地域の美術運動は起きるものか。もう自己を捨てよ。血のにじむような困難きわまりない運動を続けた、北美文化協会も来年で宣言どおり30年の運動の歴史を閉じるわけだが、一体次の時代を背負う青少年の育成や、武生地域が文化不毛の地に墮することは目に見えているが、それで良いものだろうか。(中略)せめて若いエネルギーに触れる事から出発しようではないか<sup>(6)</sup>。

「紙の実験展」は「現代美術今立紙展」と改称され、八田が運営に加わった1983年の第3回からは紙を素材とした作品に限定し、全国からの公募展とした。審査員には八田の紹介で李禹煥が招かれ、同年10月8日から16日まで開催された。以後八田は1992年の第10回まで参画したが、実行委員会の自主運営で開催していた本展は次第に行政が主体となり、八田の意向にそぐわないものになっていった。そして八田は「現代美術今立紙展」から分離して新たな文化運動を展開することとなる。1991年には「越前のこどう—現代美術今立紙展を支えた仲間達一」展、翌年には「日本のかみと現代美術」展の企画に携わっている。八田は後者の図録の挨拶文に、若い作家のエネルギーを感じてほしいと寄せている<sup>(7)</sup>。土岡・河合の死、そして自身の失明によって、芸術家としての活動の方針転換を考えるどころか、芸術家生命の危機も少なからず感じたであろう八田にとって、紙という素材を主軸にした若手作家主体の展覧会を開催することは、福井の美術文化の継承とさらなる発展への希望であったのだろう。

国際丹南アートフェスティバル

1993年から八田が仲間とともに現在まで開催しているのが「国際丹南アートフェスティバル」である。実行委員長の玉川喜一郎は、1984年に八田と出会い「現代美術今立紙展」などを通じて八田の美術と文化運動を知ったことが、本展の開催を決意させたきっかけであると述べており、八田は総監督という役に就いた。越前市や鯖江市といった武生盆地を中心とする丹南地域を舞台とし、全国から公募形式で作品が集められている点は「現代美術今立紙展」からのノウハウを生かした運営といえる。1993年の第1回展は福井県内の作家に限らず、国内外の191人と1団体から261点の作品が集まった。

本展が「現代美術今立紙展」と異なっているのは、素材を紙に限定せず、鉄・木・土・布などあらゆる素材を使った作品が募集されたことである。福井の伝統産業である越前和紙およびその制作工程で廃棄される紙の切れ端や楮の樹皮に関しては、河合と同様に八田も自身の芸術の新たな素材として関心を高めており、1992年頃から作品に使用するようになっている。しかし丹南地域は越前打刃物や越前焼、羽二重など、和紙作り以外にも歴史ある産業を有している。八田は、地域の人たちにとっては身近ながらも、歴史や伝統の重みからある種美術品のように扱われているものを、紙、鉄、土(陶土)、布などといったマテリアルとして捉え直し、作品づくりの素材とすることで新たな可能性を引き出そうとした。そして多様な素材を单一ないし複数用いることで、従来の芸術表現にとらわれない実験的な作品が発表される土壤として、「国際丹南アートフェスティバル」は企画されたのである。

また現在、地方で開催される多くの芸術祭は地域おこしの役割も担っているが、「国際丹南アートフェスティバル」でも、地域の伝統やそれに使用される素材を用いた作品で発表することによって、地域の人々と文化芸術との交流が生まれることを企図している。10年の節目を迎えた2002年には、1990年から老朽化により閉鎖されていた武生公会堂<sup>(9)</sup>が、取り壊し寸前の状

態から市民や国際丹南アートフェスティバルの実行委員会が行政に働きかけた結果展示施設として復活し、第10回展の会場となった。かつて土岡秀太郎は、地域の文化運動が人々に定着し、画期的な効果をもたらすまでは少なくとも30年はかかると考え、まずは10年の継続目標に北美の活動を開始した。八田も第10回展の開催に寄せて、10年にわたって企画を継続できたことに対する万感の思いと、地域における文化運動の重要性を綴っている。

文化運動によって、アーティスト同士だけではなく、市民とアーティスト、地場産業とアーティスト、そして市民と市民、市民と地場産業がつながりを持っていく。土岡・河合を亡くしたあの八田にとって、そうしたつながりの生まれる場所を継承し、次世代のために残していくことは、使命ともいえる仕事である。

#### おわりに

福井という一地方で豊かな美術文化が育まれてきたことは、文化の重要性を認識し、文化を育む土壤を整えるために尽力してきた人々の存在あってこそである。そして八田もそのひとりであろう。

最後に、なぜ八田は地域・地方での活動にこだわるのか。その理由を彼は次のように語っている。

地方運動というのは重要な意味を持ってきた。生きた素材が地方にはある。が、その地方さえ、春、芽を吹く柳は切られ、用水はコンクリートで固められてしまっている。こういう状況はおかしい。自然こそ、我々の素材を生む重要な拠点だから、大切にしなくてはいけない。その中で我々のエポックを見直していこう。このために、私は、この福井の土地、住んでいる武生で、もっと自由に、もっといろいろな素材を使い、(そして)多くの人達があらゆる角度で制作する場

を大切にしてあげたいと、思っている。地方でものづくりをしたら、地方に来てみてもらう。(中略)全部東京に集めるというのではなくて、ものをつくる、創造の世界も日本列島にいくつかの拠点があって、そこにその土地独特の素材があり、それを使つてものをつくるということが当然起きてい。それが地方運動の重要なところじゃないかと思う<sup>(10)</sup>。

地方に生まれ、地方に生きるなかで、その土地にある素材を生かすことで新たな文化を創造する。このことが、アーティスト、そして文化運動のオーガナイザーという二つの顔を持つ八田の根幹にある矜持なのだろう。

(8)『土岡秀太郎生誕100年記念 丹南アートフェスティバル'93〈武生〉鉄土木布かみと現代美術』丹南アートフェスティバル実行委員会、1993年、3頁。

(9)昭和天皇御大典記念事業として、1929年に武生町公会堂が開館した。コンクリート造のモダン建築は武生町のランドマークとなり、行政や文化の中心として親しまれた。改修後は地元遺跡からの出土品や作品展示を行う博物館施設として保存活用されている。2005年、国の登録有形文化財に指定された。

(10)八田豊「紙になる前の素材—新しい発見と、表現の可能性—」、吉田富久一(編)『沃土—八田豊と福井の現代アート—』現代芸術研究会、1995年、90頁。

(わたなべ・ちひろ 呉市立美術館学芸員)

## 註

(1)1993-95年は「丹南アートフェスティバル」として開催しているが、本稿では「国際丹南アートフェスティバル」と統一して表記する。2020年は新型コロナウイルス感染症の影響で中止となった。

(2)「北莊画会の記録(1)」北美文化協会(編)『福井画壇を確立した北莊画会とその周辺』、1972年、1頁。

(3)1941年、翼賛文化連盟の要請で福井県美術協会が結成され、洋画部の代表委員に土岡秀太郎が選出された。土岡は学童美術などに力を入れ、精力的に活動したが、県美術協会の設立によって北莊画会はこれに吸収されるかたちで自然消滅した。前掲書、7頁。

(4)土岡秀太郎「「文化の谷間」の前衛運動」、前掲書、10頁。

(5)佐々木哲夫「「紙の実験室」をふりかえって」『第3回現代美術今立紙展 '83』今立町・現代美術今立紙展実行委員会、1983年、12-15頁。

(6)八田豊「第2回武生美協展の周辺」『北美文化』16号、北美文化協会、1977年、21頁。

(7)『日本のかみと現代美術 '92』現代美術研究会、1992年、2頁。